

王朝日記

臼田甚五郎 阿部秋生
清水文雄 松村誠一
編

角川書店



日本古典鑑賞講座

第六卷

王朝日記

昭和三十二年十月五日 印刷
昭和三十二年十月十日 發行

定價三二〇圓 (地方價三三〇圓)

編者

白田甚五郎
阿部秋生
清水誠一
松村文雄

發行者

角川源義

印刷者

中内あき子

發行所

角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
電話九段四〇一一一〇一一五

落丁・亂丁本はおとりかえいたします

(第五回配本)

臼田甚五郎

阿部秋生

清水文雄

松村誠一

編

解説

女文字と散文

「萬葉集」において複雑な分化をとげた眞假名（萬葉假名）が、平安時代に入ると、しだいに一音一字式のものとなり、略體化されて、草假名の流通を見るにいたつた。このことは、藤原氏による攝關政治體制の成熟につれて、後宮の皇后や中宮のもとに多くの女房が蟄集するようになり、女性のみずからの文章を必要とする機会が多くなつた事實にも連關する。男性と違つて、漢字・漢文に親しめなかつた女性は、自分たちの日常の言葉をそのまま表記するために、前代以來の眞假名の字割を自由に崩すことによつて、平明で優美な新文字をつくり出した。さきに草假名といつたものがそれである。草假名はまた平假名ともいい、漢字を男文字といつたのに對して、女文字といふこともあつた。

紀貫之は、「古今和歌集」（延喜五年「九〇五」撰進）の假名序のなかで、平安初期の和歌の運命をのべて、「色好みいろこのみの家に埋うもれ木の人知れぬこととなりて、まめなる所には、花薄はなうすきはにいだすべきことにもあらずなりたり」といつてゐる。宮廷や貴族の邸宅などの晴れがましい席では、もつぱら漢詩・漢文がもてはやされ、和歌はただ、男女のひそかな戀の媒介として、命脈を保つていたに過ぎないことをいつたものである。女性が草假名を用いたのは、最初は主として、こういう場合に詠まれる和歌においてであつたろう。むろんそれは、單に和歌ばかりでなく、その和歌に添えられる詞書や、和歌をとまなう消息も、やはり草假名で書かれたであらう。このように、女性を中心とした私の世界のものではあつた短小な詞書や消息が、公の席に持ち出されて、長文の散文が綴られるようになるのであるが、その先鞭をつけたのが、さきにあげた「古今和歌集」の假名序である。

女性の開眼 和歌が直觀的・情緒的であるのに對して、散文の本質は分析的・論理的であるということである。從

つてそれは、事象の客觀的な敘述や描寫に適していた。傳統的な和歌形態にあきたらず、新たに散文が書かれるようになったことは、散文でなければ表現しきれない文學的領域が、現實生活のなかに露呈されてきたことを意味する。もつと詳しくいえば、さまざまな現實的矛盾からくる王朝びと特に女性の苦惱は、いつの間にか、彼女たちに人生に對する冷靜な觀察批判の眼を養わせた。いつたんこのような眼が開かれると、人生の哀歡を、ただ刹那的・斷片的に歌いあげるだけでは満足されなくなる。當然、その刹那的・斷片的なものを、持續的・全體的な世界のなかに位置づけせずにはいられなくなる。そこに散文文學としての物語や日記の生まれる必然性がある。

ただおなじ散文文學でも、日記は、虚構性の上に立つ物語と違い、自己告白を中心とする文學である。日記が自照文學の系列のなかに入れられるゆえんである。物語の虚構性にあきたらずして、自己の「身の上」をリアルに書き記すことによつて、苦惱からの脱出を企圖する女性もあらわれた。本書には收めなかつた「蜻蛉日記」がそれである。すでに、人生觀察の眼を開かれた人々が、みずからの眼で觀たところをこまかに表出しようとするときには、間接的な表現形式としての物語によるよりも、直接的な表現形式としての日記によるのが、効果的であつたからであらう。が、この方面に新しい道をひらいた作品は、男性作家としての紀貫之の「土佐日記」であつた。

ただ、散文と和歌との當初からの宿命的な結びつきは、日記文學にも受けつがれ、寫實的な自己告白の日記のなかにも、和歌的な抒情性が湛えられていることは、やがて和歌的なものが、日本文學の傳統の芯となつて今日まで流れてきている事實にもつながる事柄で、日本文學史上の大事な問題である。なお、贈答歌を資材として發展した日記が、若干の虚構性の參與によつて、歌物語とよばれるものにもなりえた王朝の事情も、ここで心にとめておく必要がある。

四つの作品 「土佐日記」は、紀貫之が土佐守の任期を終えて、承平四年（九三四）十二月二十一日、その任國土佐を船出して、翌承平五年二月十六日京都に歸りつくまでの旅日記である。旅のつれづれに書きとめられたメモをも

とにして、歸京後間もない頃書きあげられたものであろう。冒頭の「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」という言葉は、當時男性たちによつて物されていた漢文日記に對して、新たに女文字すなわち草假名による和文日記の世界を開拓しようとする、貫之の意欲を示したものである。窮屈な官僚的教養の形式から解放されて、客觀的に「私」の經驗を記録しようとした所が見え、清新で自由な精神がみなぎっている。ただ、日記文學の本質である自照性に缺けるところがあつたが、この方面に徹して、女性みずからの手により日記文學の本領を發揮するのは、道綱の母の「蜻蛉日記」をもつて嚆矢とする。

「紫式部日記」は、寛弘五年（一〇〇八）七月から寛弘七年一月までの、土御門殿（中宮彰子の父道長の私邸）における彰子の皇子出産を中心とする、公私の行事や生活を寫したもので、なかに、和泉式部・赤染衛門・清少納言等を批評した消息文が混入している。書かれた時期は不明であるが、手控えのようなものをもとにして、後から整理執筆されたものであろう。「和泉式部日記」の物語的態度と異なり、客觀的記述の日記であり、そこには外界の花やかさに酔いきれぬ、厳しい自己凝視があつた。他人に對する批評も見えるが、それは自己を含めた人間一般への批評に擴大されてゆく。作者の人間觀察の限は磨ぎすまされて深い。他人の愚劣さに直面しても、一步退いて、それを人間の悲しい負目として、靜かに觀照する態度をとる。救いようのない憂愁が、この作品を充たしているゆえんである。さまざま人間の、さまざまな運命を織りなす「源氏物語」の大作が、この作者によつて書かれたのも、理由あることであつた。

「和泉式部日記」は、和泉式部が、帥宮敦道親王との戀愛交渉を物語風に記したもので、長保五年（一〇〇三）四月帥宮から求愛の使がくる所にはじまり、十二月十八日宮の南院へ迎え入れられ、翌年正月宮の北の方が里歸りされる所で終つている。宮との間に交わされた贈答歌や消息の類を資材とし、歌物語的な傾向は強いが、やはり式部みずからの手で、寛弘四年（一〇〇七）の宮の薨去を餘り隔たらない頃に書かれたものであろう。帥宮の薨去後は、一

時中宮彰子に奉仕したことがあり、その頃ちようと紫式部も古參として同じ宮に出仕していた。王朝文化の爛熟の陰に、すでに崩壊の危機が見えそめた時代である。この時代の影が、「紫式部日記」には、「うつし心」の憂愁として湛えられているのに對して、「和泉式部日記」には、「つれづれ」の虚無感となつて流れている。そして自己告白というよりも、帥宮との戀愛生活そのものを客觀的に描き出そうという意圖が、この日記には見える。

「更級日記」に、菅原孝標の女の作である。寛仁四年（一〇二〇）、作者十三歳の秋、父の任地上總を出發する所に筆をおこし、康平二年（一〇五九）、作者五十二歳の頃で終つており、その年か翌年ぐらゐに全篇がまとめて書かれたものであろう。「紫式部日記」や「和泉式部日記」から約半世紀後に書かれたこの日記には、すでに王朝末期の時代の暗さは蔽いようもない。喪われた世界の過去を物語のなかに求めて、少女時代から夢多き日を送るが、やがて、夢想の世界と現實の世界との乖離に目ざめると、宗教をより高い次元のものとして、それに新たに心をつなこうとしたところが見える。

作者略傳 紀貫之は望之の子。醍醐・朱雀の兩朝に仕え、御書所預・土佐守・玄蕃頭・木工頭に進み、天慶八年（九四五）秋頃歿した。享年未詳。従兄弟の紀友則等と共同で編纂した「古今和歌集」は、勅撰和歌集の濫觴となるとともに、その歌風は古今調として、後世の和歌の規範となつた。また彼の執筆になる假名序は、わが國最初のまとまつた文學論で、和歌を、漢文學に對する日本文學としての新しい自覺のもとに、再興させようという意氣込みが見えている。著作には、家集「紀貫之集」のほか、「大堰川行幸和歌序」「土佐日記」「新撰和歌」等がある。

紫式部は、藤原爲時の女。爲時は儒者で詩文に長じ、兄惟規も歌人であつた。はじめ藤式部（「藤」は藤原、「式部」は父の官職式部丞によるか）、後、紫式部（「紫」は「源氏物語」の紫の上によるか）とよばれ、幼時から聰明で漢籍・佛典に關する教養も身につけていた。十九歳の頃、父が越前守として赴任したとき從つて下り、歸京後二十二歳ぐらゐで、當時四十八歳の藤原宣孝に嫁し、一女（大貳三位）をあげたが、二年後夫に死別、寡居の間に「源氏物語」に

筆を染め、三十歳の頃中宮彰子の許に出仕したらしい。天元元年（九七八）頃生まれ、長和五年（一〇一六）頃、三十九歳ぐらいで歿したといわれる。「源氏物語」のほか、「紫式部日記」「紫式部集」がある。

和泉式部の父は大江雅致、母は平保衡の女。雅致は道長に重用されて、太皇太后宮大進・木工頭・越中守等に歴任した。彼女は幼名御許丸、長じて雅致女式部・江式部、和泉守橘道貞と婚するに及び、和泉式部とよばれた。「式部」はその父が式部丞ぐらいの地位にあつたための呼び名でもあろうか。道貞との間にはまもなく小式部内侍をなした。やがて爲尊親王、ついで敦道親王に愛される身となつたが、その兩親王にも相ついで死別した。その後、寛弘六年（一〇〇九）晩春の頃中宮彰子の許に出仕し、それが機縁となつて道長の家司藤原保昌に再嫁し、夫が丹後守になつたとき、式部も従つて下つた。萬壽二年（一一二五）小式部の死に逢い、その翌々年頃の歌を最後として、消息は不明となる。その数奇な生涯は幾多の和泉式部傳説を生み、お伽草子や謡曲にも題材を與えた。生歿年未詳。「和泉式部歌集」「和泉式部日記」がある。

菅原孝標の女は、寛弘五年（一〇〇八）に生まれたが、歿年は不明である。父の孝標は道貞四世の孫、母は藤原倫寧の女、道綱の母は母の姉、歌人長能は母の兄に當たる。また兄定義は大學頭・文章博士、繼母の上總大輔は歌人であり、彼女の縁者に紫式部の女大貳三位が嫁している。十三歳のとき父の任地上總から歸京、三十二歳のとき祿子内親王家に出仕したが、間もなく退き、三十數歳にして橘俊通と結婚、仲俊を生んだ。康平元年（一一〇五八）五十一歳のとき夫に死別して寡居の生活に入り、その翌年頃までの記事が日記に見えるが、その後は消息不明である。「更級日記」を書いた外、「濱松中納言物語」「夜半の寢覺」の作者にも擬せられている。

（清水文雄）

若紫やさぶらふ

酔う人と酔えぬ人 (九〇)

御草子づくり

草子づくりの女房 (九三)

里居

自作「源氏」を語る (九七)

新參の思出

荒涼とした師走の心 (一〇〇)

人々の心ばせ

齋院の中將 (一〇三) 齋院の生活と中宮の生活 (一〇四) 背の
 びする清少納言 (一〇六) 煩わしい女房勤め (一一二) 批評と
 いうこと (一二四) 同輩に對する批評 (一二七)

わが身のありさま

生きる支え (一二三) 觀察する人 (一二五)

日本紀の御局

諷諭詩・樂府の愛用 (一二八)

求道の思ひ

聖の佛法 (一二九) 消息文の讀者 (一三〇)

和泉式部日記物語

清水文雄

三元

少女の悲願 (一三六) 背の人 (一四〇) 花橘 (一四二) 初めて
 物を思ふ身 (一四二) 雲間なきながめ (一四四) 月夜の遠出
 (一四六) 誤解 (一四八) 人は草葉の露なれや (一五〇) 近江

八六

和泉式部日記

清水文雄

一四一

初めて物を思ふあした

橘のゆかり (一五五) 忍び歩き (一五六) きぬぎぬの文 (一五六)

長雨晴れまなき頃

倦忍と目覺 (一五七)

波瀾

戀の迷避行 (一五七) 石山詣で (一五八)

秋から冬へ

贈答歌の用語 (一六〇) 戀歌の代作 (一六六) 手枕の袖 (一六六)

女のようにめき (一六〇)

ともかくも仰せのままに

言の葉のふかく (一六〇) 召されて宮邸へ (一六三) 終曲 (一六五)

更級日記物語

松村誠一

一三三

少女のころ

都をさして (一六三) まず物語を (一六四) 「源氏物語」を手
 にして (一六四) 空想と憧れ (一六五)

宮仕えと結婚

老地方官の父 (一六五) 鐘のかげ (一六六) 期待はずれの宮仕
 え (一六七) 結婚 (一六七) 自活 (一六八) 急轉 (一六八)

老のわが身

念轉 (一六八)

の海 (一四四) 心亂れて (一四五) 成るべきように (一四六)
 挽歌 (一四七)

一四一

一六六

一七三

一八六

二〇六

二三三

二三五

三三九

孤獨の涙 (三九)

更級日記

少女の頃

地方と都 (三三) 物語の愛讀者 (三三) 同覽された「源氏」の寫本 (三三) 空想と憧れ (三三)

宮仕えと結婚

老地方官の述懐 (三四) 夢とたがう宮仕え (三五) 結婚の幸福 (三五) 群衆の流れを活寫 (三七) 受領階級の家庭 (三七)

老のわが身

夢と悔恨 (三七) 寡婦の信仰 (三八)

王朝日記の窓

わたくし文學

池田 勉 二五

わたくしの名は (三六) ルソオと「私」 (三六) わたくし文學の誕生 (三七) 妻の中の人 (三七) 愛情の問題 (三七) わたくしの日ざめ (三七) 誇りたかき女 (三九) 文學の方法としての告白 (三九) 清少納言のわたくし (三九) わたくしの不安 (四〇) 虚無のわたくし (四〇) わたくしの消滅 (四〇) 平安朝のわたくし文學 (四一)

假面と素面——「土佐日記」の場合—— 白田甚五郎 二六

「土佐日記」の象徴 (二六) まほの日記とかたほの日記 (二六) 假名による歌日記 (二六) 女性の假面 (二六) 「古今」歌人の虚構 (二七) 虚構の母胎 (二七) 王朝古典の擬裝 (二七) 假構のもたらすもの (二八) 擬裝の意圖 (二八) 假裝の利

點 (三〇) 矛盾と混亂 (三〇)

受領の娘——女流作家の誕生—— 秋山 虔 三〇

女流文學 (三〇) 中流層の女性 (三一) 女流文學の開化 (三一) 「蜻蛉日記」の自覺 (三一) 美貌と才氣の道綱の母 (三一) 物語への期待 (三一) 要請される日記 (三一) 明暗の描寫 (三一) 空想過剰 (三一) 「蜻蛉日記」の基調 (三一) 歌人道綱の母 (三一) 嘆きと不安の贈答歌 (三一) 「蜻蛉日記」の主題の推移 (三一) 内面描寫の開發 (三一) 多彩な女流作家 (三一)

宿業の憂愁——女房紫式部の想念—— 阿部 秋生 三一

一 不本意な宮仕 紫式部の出仕 (三二) 誰やかな清少納言 (三二) 謙虚な宮仕 (三二) きらわれた宮仕 (三二)

二 わが身のほど 噂とねたみ (三三) 宮仕ずれ (三六)

三 十善の天子ということ 宿世觀 (三六) 人格主義 (三六)

四 宿業の曝しもの うとましの身のほど (三七) 動きのつかない宿世 (三七) 問題を背負う清少納言 (三七) 宿業のさらしもの (三七)

五 憂愁の想念 暗晦のポーズ (三七) 憂愁の佳人たち (三七)

物語の女——「待つ戀」と「眺め」—— 清水 文雄 三六

架橋者の悲しみ (三六) 象徴としての橋 (三六) 王朝女性の運命 (三六) 衣通姫の流 (三六) 夢の詩人小野小町 (三六) 班女の扇 (三七) 澤の螢 (三七) 慰歌としての戀と歌 (三七) 物語の女 (三七)

四季の繪卷 角川源義 三三

一 繪卷物の世界 落日の幻想 (三三) 繪卷物と繪解 (三三)

眞野の長者 (三三) 宿驛の長者 (三三) 竹芝寺縁起 (三三)

繪卷物の趣向 (三三) 足柄山遊女圖 (三三) 富士の神々の

會談 (三三) 東海道と京都 (三三)

二 「更級日記」と繪卷物 「更級日記」と藤原定家 (三三)

繪卷物としての「更級日記」 (三三) 繪卷物の流行期 (三三)

月次繪流行 (三三) 繪卷物の家 (三三) 幾つかあつた更級

繪卷 (三三)

三 夢ばかり後のたのみに 物語への思慕 (三三) 夢

のつげ (三三) 繪卷物と夢 (三三) 初瀬の旅 (三三) 純

捨山 (三三)

御簾のうち——物覗きの心—— 青木生子 三三

室内の文學 「しつらへ」 (三三) 簾のうち (三三) かく

れたものの魅力 (三三)

日記・隨筆に描かれた簾 王朝日記 (三三) 紫式部の

もののぞき (三三) 清少納言の感覺 (三三) 御簾の役割

(三三) 甚をうつ二人の女 (三三) 琵琶と琴の合奏 (三三)

喪服姿の姉妹 (三三) 物縫う火影 (三三) 曙の権櫻 (三三)

猫のいたずら (三三) 御簾のうちへのあぐられ (三三)

平安の旅 奥村恒哉 三七

平安の旅 (三七) 旅の感覺 (三七) ロマンティズムの旅

(三七) 「土佐日記」の旅 (三七) 「土佐日記」の魅力 (三七)

故郷喪失 (三七) 都すまい (三七) ウェイトの軽い羈旅

(三七) 地名集成 (三七) 固定化された歌枕 (三七) 文學

的權威ある土地 (三六) 長谷詣で (三六) 歌枕の救い (三六)

平安の旅——魅力の核心 (三六)

王朝日記研究小史 稻賀敬二 三三

一室町時代までの研究 三三

二 江戸時代の研究 三五

三 明治大正期の研究 三六

四 昭和期の研究と學界の展望 三七

五 小説と現代 三九

参考文献 稻賀敬二 三三

一 王朝日記文學全般 A 單行本 (三三) B 講座類所收

(三三)

二 土佐日記 A テキスト・複製と研究 (三三) B 註釋と

研究 (三三)

三 蜻蛉日記 A テキスト (三三) B 註釋と研究 (三三)

四 紫式部日記 A テキスト・複製と研究 (三三) B 註釋

と研究 (三三)

五 和泉式部日記 A テキストの複製・編刻と研究 (三三)

B 註釋と研究 (三三)

六 更級日記 A テキスト・複製と研究 (三三) B 註釋と

研究 (三三)

七 その他の日記類

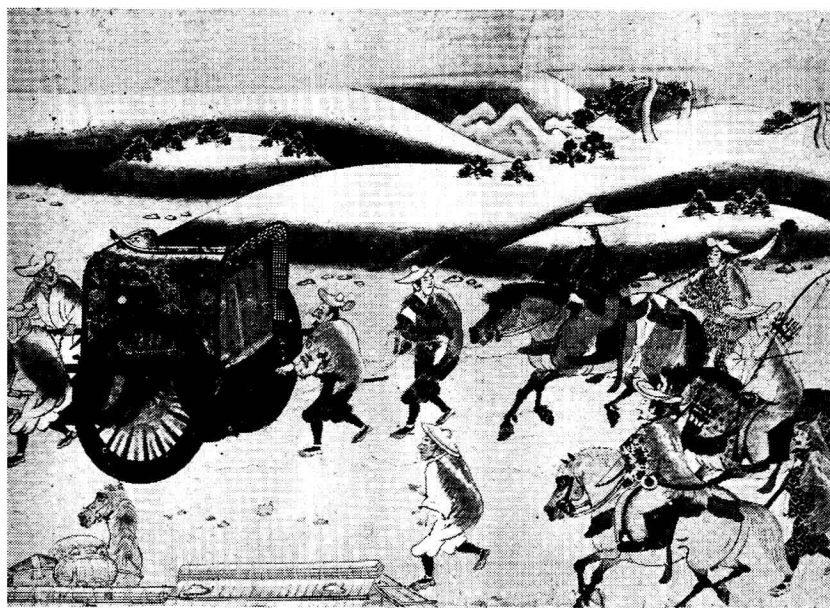
八 現代語譯・小説

三七

三七

王朝日記

土佐日記	白田甚五郎
紫式部日記	阿部秋生
和泉式部日記	清水文雄
更級日記	松村誠一



石山寺に詣でる菅原孝標女の馬上姿（石山寺縁起繪卷）

土佐日記物語

田 甚五郎

旅の辛苦 四日間で、世界を一周出来る今日でも、馴れない旅路には、一抹の不安と一片の期待とが入りまじるものである。……と書き出しながら、「蛇之助五百韻」の中の句を思い出した。

信玄の分別袋あけくれに

はなしの種やのこす日日記

小づかひの錢かけ松を旅に見て

講まいりなる伊勢の神風

これは、延寶五年（一六七七）に刊行された田中常矩の獨吟である。常矩は京洛談林の將で、當時三十五歳（京大の古今和歌集講義による）。信玄袋から、それをかついだ旅人の姿が浮んで来る。旅する人の楽しみは、話の種が、旅日記にふえて行く事である。その旅日記には、小遣の出入り

（入りはほとんどあるまいが）を當然書き込む、どうも次第に心細くなつて來た所で、錢掛け松が眼に入ると言う次第。

金錢の流通は、平安時代にはごく限られていたらしい。「信貴山縁起繪卷」尼公卷を見ても、旅装には米俵のようなものが携帯されている。旅行の辛苦は想像するに餘りある。

船團の指揮官貫之 貫之は、國守で一財産こしらえると言うような貪婪（どん欲）惡辣な吏僚と違ふから、錢はあまり持つていなかつたようである。かなりたくさん的人数で歸京の途についたから、舟も一艘ではない。木の葉が散つたようだと形容している時もあるから、二艘どころか數艘に及んだかもしれない。船員には米で支拂つたと思う